



大連理工大学・立命館大学

国際情報ソフトウェア学部の開設

—グローバル IT 人材の育成に向けて—

Establishment of DUT-RU International School of
Information Science and Engineering:
Towards the Development of Global IT Human Resources

立命館大学情報理工学部教授 大久保 英嗣

OKUBO Eiji

(College of Information Science and Engineering, Ritsumeikan University)

キーワード：グローバル人材、留学政策、ダブルディグリー、IT、ソフトウェア開発、グローバル化

1. はじめに

大連理工大学と立命館大学が共同で開設準備を進めてきた「大連理工大学・立命館大学国際情報ソフトウェア学部（以下、新学部）」が、2013年3月27日に中国政府教育部より正式に認可された。このことを受けて、両大学は、2014年9月に大連理工大学の開発区キャンパス内に新学部を開設することを正式に決定し、9月9日に一期生の入学式が行われた。日本の大学が海外の大学と学部を共同設置することは初めての取り組みとなる。以下では、新学部開設において両大学の目指す人材育成と、新学部の概要について紹介する。

新学部は、中国の教育制度の下、中国人学生を中心に、日本を含めた諸外国の学生も受入れの対象としており、理論と実践のバランスがとれた国際的に活躍できるグローバルIT人材を育成することを目標としている。

新学部の教育内容は、教養科目と語学からなる基礎科目、専門基礎科目、専門科目から構成される立命館大学情報理工学部のカリキュラムを基本としている。入学定員は100名であり、その内40名は3年次に立命館大学情報理工学部へ転入学し、4年間で両大学の学位を取得することができる。なお、新学部設置に先んじて、2012年9月より大連理工大学の既設の軟件学院に実験コース（パイロットコース）を開設し、30名の学生が入学した。そのうち15名が2014年9月に、立命館大学情報理工学部の3年生に転入学している。



大連理工大学軟件学院新入生向け
実験コースの説明会（2012年9月）



大連理工大学開発区キャンパス

2. これまでの経緯

立命館大学情報理工学部は、2004年4月の開設以来、「国際社会を舞台に活躍できる人材の育成」を教育目標の1つに掲げ、教育・研究の国際化を積極的に推進してきた。これまでの情報理工学部の国際化の取り組みの中で、中国、ベトナム、タイ、インドなどのアジア地域の大学との交流が進んでいる。特に、中国の大連理工大学とは2007年10月より相互訪問を含めた教育・研究交流が進んできた。その中で、2009年10月、大連理工大学軟件学院の羅院長を始めとした代表団が情報理工学部を訪問し、日中共同でソフトウェアに関する教育・研究を中心とする新学部を設立する構想に関して、立命館大学情報理工学部への協力要請があった。以来、両大学は新学部構想について、2010年9月から2011年5月までの計6回にわたる協議を行った結果、設立の目的、人材育成目標、カリキュラム構成など、基本構想に関する双方の認識が共有でき、両大学としてこれまでの合意事項を踏まえた方向性をまとめるに至った。

3. 新学部設立の意義：IT分野において求められるグローバル人材の育成

グローバル化が急速に進み、様々な企業がアジアへと進出している現在、アジアは製造拠点としてだけでなく、情報システムのソフトウェア開発拠点としても発展をとげており、世界でも重要な位置を占めるようになってきている。

今日、企業においては、大規模な情報システムの運用は必要不可欠なものとなっている。また、製造業においても、自動車や家電の制御用ソフトウェア開発などのIT分野の強化がより重要になってきている。これらのソフトウェア開発も、日本国内で完結するのではなく、海外で行い、内容をすり合わせて完成させることが頻繁に行われるようになってきている。現在、大連市には、日本の企業を含む約400社のIT関連企業が進出している。また、海外拠点との連携を保つために、日本国内でもグローバル人材のニーズが高まっている。

このような環境の変化によって、限られた分野でITエンジニアが活躍するという時代は終わり、海外と連携してディスカッションしながらシステムを創造できる人材が求められ始めている。特に、日本の将来の人材育成を視野に入れた場合、日本国内における教育の国際化だけでは不十分であり、日本人学生を海外に派遣し、グローバル人材として育てていく視点が重要であるのは言うまでもない。このためには、今までの国内を中心とした教育展開の考え方から一歩進めて、海外で先進的な日本の高等教育システムを展開し、国内外の優秀な人材を育成する必要があると言える。このことは、グローバルに展開している日本企業に優秀な人材を供給するのみならず、出身国と提携国の互いの歴史・文化を理解し、グローバルに活躍する人材の育成にもつながる。

立命館大学ではこのような変化に対応したグローバル人材の育成に向け、これまでもベトナム・ハノイ工科大学、中国・瀋陽の東北大学などの海外教育機関と連携を行い、IT分野の教育に注力してきた。次世代を担う若者が、自らのモチベーションを基に学びの環境を構築できるシステムを東アジア地域の大学・企業との産学協同で推進してきた。その積み重ねた経験と実績の成果が、立命館大学と大連理工大学との新学部の共同設立に至ったのである。

4. 新学部の基本構想

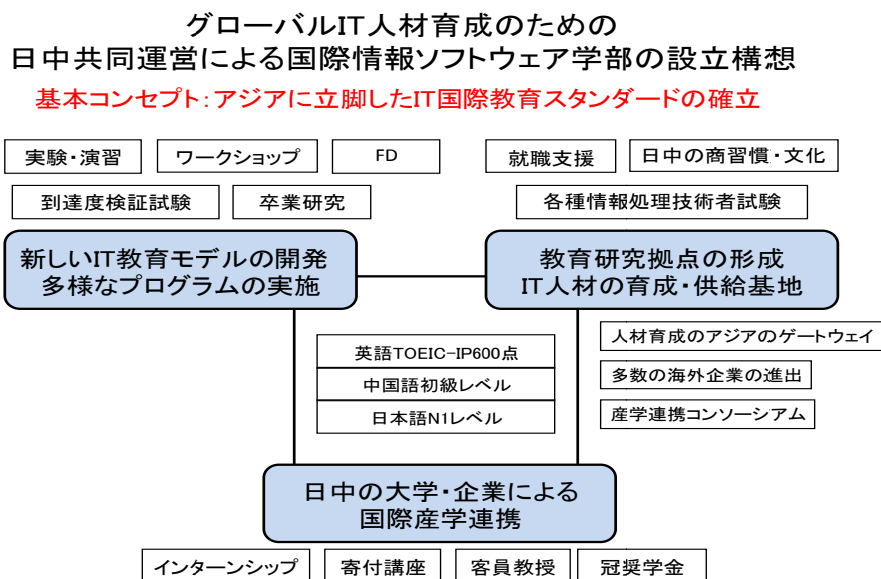
4. 1 基本コンセプト：アジアに立脚したIT国際教育スタンダードの確立

新学部では、中国ならびに日本を含めた諸外国の優秀な学生を受け入れ、理論と実践のバランスがとれた国際的に活躍できるグローバルIT人材を育成することを目標としている。そのために、日本政府、中国政府、大連市を始めとした地方自治体、ならびに日中の企業の支援を仰ぎ、以下の3点を基本として両大学共同で教育・研究を推進していくこととしている。

- (1) IT分野におけるグローバル人材育成のための教育モデルの開発
- (2) 中国東北部については東アジア地域の教育研究拠点の形成
- (3) 日系企業ならびに中国企業と立命館大学・大連理工大学4者による国際産学連携

新学部の基本コンセプトは、「アジアに立脚したIT国際教育スタンダードの確立」としている。すなわち、IT教育の国際基準を作っていくことである。その柱は、上に示したように3つある。1つ

目は、「IT分野におけるグローバル人材育成のための教育モデルの開発」。産学連携を含めた学習カリキュラム・インターンシップの整備を通して、国際的な基準となるような教育モデルの開発を目指す。2つ目は、「中国東北部ひいては東アジア地域の教育研究拠点の形成」。大連を中国東北部をはじめとする東アジア地域の研究拠点として、周辺の研究・教育機関との連携を進めていく。ここからアジア全体へ、世界への展開を目指す。3つ目は、「日系企業ならびに中国企業と立命館大学・大連理工大学4者による国際産学連携」。大連に進出している日系企業や現地中国企業と協働し、インターンシップなど双方にメリットが生まれる産学連携モデルを確立していく。



4. 2 設置形態

(1) 名称

日本語名：大連理工大学・立命館大学国際情報ソフトウェア学部

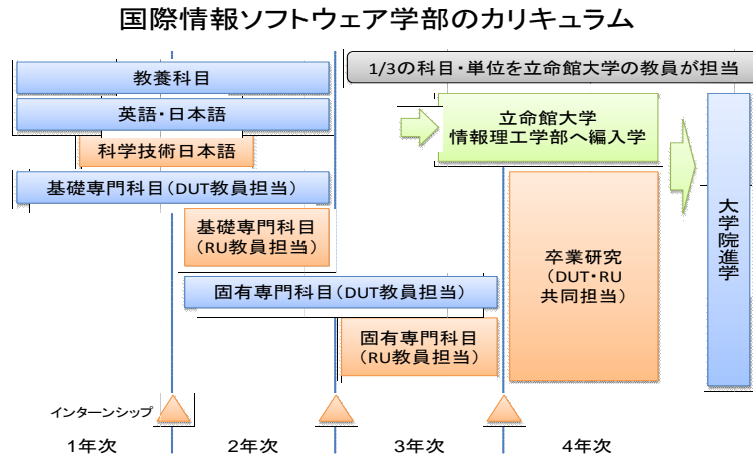
中国語名：大连理工大学—立命馆大学国际信息与软件学院

英語名：DUT-RU International School of Information Science and Engineering

(2) カリキュラムの構成

中国教育部の「中外合作办学機構」に関する申請基準では、総授業科目数、コア科目数、総授業時間数、コア科目時間数に関しては、外国の教育機関がいずれも3分の1以上を担当しなければならないと規定されている。それらに照らし合わせて、立命館大学は全178単位の3分の1に相当する60単位の科目を提供することになっている。大連理工大学は元々充実した日本語教育が提供されていることで知られているが、新学部においては、IT分野特有の日本語表現を扱うための「科学技術日本語」科目を

設置し、立命館大学側の教員がこれを担当する。また、理論と実践のバランスに長けた人材を育成するために卒業研究を導入し、立命館大学側の教員も指導に加わるほか、立命館大学の学生も一定期間大連理工大学に滞在し、共同で研究や企業インターンシップを行うことも計画している。



(3) 設置場所

開発区キャンパスにある大連理工大学軟件学院のC号棟を使用している。C号棟は5階建てとなっており、1階は学生のイノベーションセンター、2階から4階は、情報処理演習室、実験室、大教室などが配置されている。5階は、新学部の卒研室として準備されている。なお、立命館大学から赴任する教員の研究室は、当該建物の4階および5階に整備する予定である。



施設の状況 1 (演習室)



施設の状況 2 (学生ラウンジ)

(4) 学生定員

新学部は、4年制の学部とし、設立当初は1学年100名の定員で主に中国の学生を受け入れる。定員は、既存の軟件学院からの振替で設定するが、将来は300名程度に増員することも念頭に置き、日本あるいは他の国からの学生も受け入れる。なお、大学院は、学部と並行して検討している。新学部の1学年100名のうちの40名の学生は、立命館大学の3年次に転入学が予定されている。



大連理工大学-立命館大学国際情報ソフトウェア学部の開講式の様子（2014年9月9日）



新入生に挨拶をする共同学部日本側学部長の大久保英嗣情報理工学部教授（2014年9月9日）

（5）学位

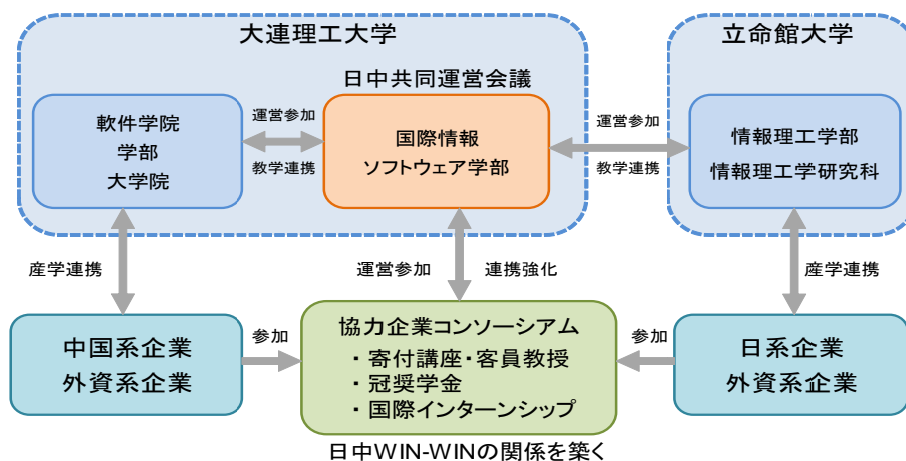
大連理工大学の学位を授与する。ただし、100名のうちの40名の学生は、立命館大学に3年次転入学し、ダブルディグリー制度（DUDP）によって、立命館大学の学位を取得することを可能としている。

（6）共同運営

新学部の意思決定を行う共同運営会議や、日常の教育を支える事務組織も両大学の人員により組織されている。双方の大学による新学部の管理運営を共同で行うのみならず、双方の大学の教員による授業や演習の共同開講、双方の大学の学生の受け入れおよび派遣、産学官連携による共同教育・共同研究を推進する。

中国政府は、海外教育機関との連携を長期かつ安定的に運営する観点から大学間の共同機構（組織として、プログラムではない）の契約期間は20年間を許可の目安として設定している。従って、立命館大学と大連理工大学との共同併学機構としての存続期間は20年としている。但し、プログラムの見直しを5年毎に行うことを共同運営会議の管理規程に盛り込んでいる。

国際情報ソフトウェア学部の国際産学連携による運営スキーム



5. おわりに：国際化の次の段階を目指して

新学部は、国際化に関わる立命館大学ならびに情報理工学部のこれまでの経験を活かし、日本の高等教育機関の本格的な中国進出と位置づけられる。すなわち、中国で初めて日本の高等教育段階の教育を行うことになり、日本国内のみならず中国においてもそのインパクトは大きく、立命館大学のみならず日本の大学のプレゼンスが国際的に高まることが期待できる。

立命館大学のみならず、一般に、理工系では系統履修などのカリキュラム設計上、高学年の学生の長期留学は難しいとされてきた。一方、技術者育成の観点からは今後、ますます国際的な研究開発人材は重要となってきた。今次の本格的な中国での展開によって、立命館大学の学生は新学部で留学し、立命館大学の設計したカリキュラムのもと、日本語基準で授業を受けることができる。授業そのものの3分の1は立命館大学によって提供されているため、留学は容易となる。現地で授業を受けながら長期のインターンシップも可能となる。さらに、立命館大学と共同で運営する学部であるため、現地に赴任する立命館大学の教職員の直接指導も受けられるメリットは大きい。また、現地で中国の学生と一緒に学ぶことによって、日中双方の学生は学問分野の交流のみならず、同世代の若者同士、文化の交流も期待できる。さらに、海外でチャレンジ精神や異文化理解の能力を培うことができることの意義は非常に大きいと言える。

今次の連携によって、立命館大学の教員はローテーションで現地に赴任する。現地で中国人学生に対して日本語あるいは英語で講義を行い、研究指導を行うことになっている。このことは、立命館大学の教員の国際化の促進にもつながると考えている。

一方、立命館を始めとした日本の大学に安定的に優秀な留学生を受入れることで、文化・生活習慣の違う学生たちがともに学び課題に取り組む環境を日本において作ることも可能となる。また、大連から派遣される中国の学生も海外で共同研究を行うなど、本格的な教育を受ける可能性を追求できるなど、日中双方において異文化を理解しながら学ぶ環境が整備される。学生は、このようなしくみの中でグローバル人材に求められる能力の理解、モチベーションの向上、異文化理解・交流を実現することができると考えている。

立命館大学は、海外で学部・大学院の教育を展開するパイロットモデルになることを目標として、今後もこの取組みを発展させていきたいと考えている。